

麻布と落語(おかめ団子)



平成 26年(2014年)

「おかめ団子」跡。間口3間(約5m45cm)、奥行11間(約20m)の総2階という店は、いつも客であふれていたと、当時の繁盛ぶりが伝えられている。



平成 26年(2014年)

団子屋こそないが、跡地周辺には10年、20年と“商い”をしている飲食店が少なくない。



昭和 39年(1964年)

：六本木五丁目付近(写真左端が飯倉片町)

古典落語には、麻布界隈が舞台として登場する噺がいくつかある。江戸時代から明治時代まで飯倉片町に実在した団子屋が舞台の「おかめ団子」。「井戸の茶碗」に登場する正直者のくず屋の清兵衛は、麻布谷町の住人として描かれている。これら二つの人情噺を通して、江戸からつづく麻布の歴史と今を訪ね歩いてみた。



地図中、赤い点線は、左の写真のおおよその範囲を示したもの。

おかめ団子(あらすじ)

飯倉片町の「おかめ団子」は、一人娘のおかめが美人の上、愛嬌があるとあって、たいそう繁盛していた。

ある風の強い日、そのおかめ団子が早めの店じまいをしていたところ、貧乏な身なりの男が一盆の団子を求めて店にやってきた。番頭は追い払おうとするが、客と知った店の主は招き入れ、その貧乏な身なりの大根屋、太助に団子を振る舞い、さらに太助が毎日母親のために買っていると聞き、礼として一包み包んだ。

家に帰った太助は、母親に団子を食べさせながら、固い布団のせいで体を痛がっている母にどうか柔らかい布団を買いたいと思った。先だっておかめ団子で団子を食べながら見たたいそうな額の売り溜めを思い出し、母がいなくなってからは親孝行はできないと、その夜おかめ団子に忍び込むべく寒風吹く中出かけた。

途中、犬に追われたりしながらも、おかめ団子の庭先に入り、「さてどうしようか」と思ったちょうどその時、雨戸がすっと開き、おかめが庭先へ出てきた。そして、縁側から踏み台を出し、木の枝に帯を掛け首をくくろうとしたのを見て、太助は夢中で助けた。

無理に勧められた縁談をおかめはいやがっていたのだった。その騒ぎに気づいた主は助けに入っていた太助に顛末を聞いていたが、ふとなぜ太助がここにいるのか不信に思い事情を聞いたところ、太助は母に布団を買いたいがために盗みに入ったと正直に話した。主はその親孝行ぶりと正直さに感心しお金を渡して帰した。

その後、おかめは太助と一緒にいたいと言いだし、太助は団子屋の養子となり、おかめ、母親ともども幸せに暮らし、店は繁盛したという。